

# 久保貞次郎論

## ——初期の交友を通して——

太田 將 勝\*

(平成14年4月30日受付；平成14年6月17日受理)

### 要 旨

1930年代から第2次世界大戦の戦中戦後をはさみ、90年代末に至る約半世紀の間、広義のリベラリズムと美術教育の推進と指導を通し、その透徹した思想と主張を貫いた久保貞次郎の生涯は、まことに稀有なものであるといえよう。いわば普遍的な真・美の基準を持しつつ、公平・公正の精神に徹し、偽善・欺瞞の無い言説や行為、運動に終始しえたことは、まことに驚嘆に値する。

氏の没後4年有半を経過した今、久保佳世子夫人、久保・小此木両家、関係の方々の協力を得、現時点で押さえられる広汎な資料を収集しつつ、その思想と実践の意味とを掘り下げ、氏の運動の意義を総合的にふりかえることは、おそらく時宜にかなったことであろう。

本稿は、そうした構想・方向にもとづき、氏にかかわる伝記的事実を巨細にわたってながめながら、困難な時代を背景に所信を貫いたその生涯と思索の跡を永劫にどめようとするものでもある。

### KEY WORDS

児童画研究 a study on juvenile pictures and drawings  
美術教育 art education

### 1

久保貞次郎が生涯兄事し、肝胆相照した執友ともいえる存在は、画家北川民次である。1938年（昭和13）6月、美術に志しはじめた貞次郎が瑛九らの勧めにより、東京市豊島区長崎仲町の自宅を訪ねたことは前にも触れたとおりだが、この時民次は国吉康雄、ヘンリー杉本らに在米の知人たちへの紹介状をしたため、8月渡航予定の貞次郎に托している。

この2度目の渡米が成功を見たのは、民次の配慮によるところ大きいのが、これを機縁に貞次郎は民次の美術や文化に対する見識に限らず、広く社会や人間に対する一貫した考え方に多くの影響を受け始めた。<sup>(1)</sup>

貞次郎が在外に過した1938年（昭和13）12月、真岡で開いた第2回児童画公開審査会では、新加入の民次が美術教育者・実作家として有効な発言をし、会を推進したことは想像に難くない。こののち戦時色の濃くなった1941年（昭和16）7月、民次は軽井沢の貞次郎の別荘を訪ね、

---

\* 芸術系教育講座（美術）

9月、(民次は)土岡秀太郎との企画による福井県全県の児童画公開審査会を開催し、貞次郎、小此木真三郎、木下繁らとともに審査を行っている。

戦時中も、民次は貞次郎の疎開先真岡を度々訪ねているが、終結後1947年(昭和22)9月、東京日本橋三越で催された「久保コレクションの世界児童画展」に合わせて企画された東京都小学校児童画公開審査会の審査に加わった。同審査には他に貞次郎、小此木真三郎、猪熊弦一郎、田近憲三らが当たっている。

## 2

北川民次の生涯と芸術について、ここで少し詳しく触れておきたい。<sup>(2)</sup>

北川民次は、1894年(明治27)1月17日、静岡県榛原郡五和村牛尾に、父幸次郎、母きくの五男として生まれている。北川家は代々地主として知られたが、当時は製茶も営んでおり、民次の上に異母兄2人、異母姉1人、異腹姉1人、実兄2人、実姉1人がいた。幼少時代の民次はやや虚弱と見られていた。実際病気がちで体力のなかった民次はいつも植物の採集をして過していたという。後年貞次郎は民次の植物に関する知識の正確さ、豊富さに幾度か驚かされたと言っているが、その知識は幼少時代に得られたものである。

小学校を卒業後、静岡県立商業学校に進み、1910年(明治43)に卒業。同年早稲田大学商学部予科に入学した。静岡商業在学中に、家蔵の帝国文庫中の江戸軟文学を読みあさり、同校上級に進んだ頃には、女義太夫を聞きに芝居小屋に出かけ、その場を教師に見つけられ、停学寸前に追い込まれたことがあった。が、級友たちの嘆願や同盟休校、土地の有力者だった長兄の幹施で、辛うじて事無きを得た。後年の民次の巾広い交友や柔軟な着想・思考は生得の人間性によるところは勿論であろうが、自らを弱者として物事を捉える基本的な姿勢や文学等を通しての、深い人間理解への習慣が大きくあざかったものであろう。

1910年(明治43)上京後、高田馬場の下宿に住み、大学予科に通学した。早稲田の仲間との交友が始められ、高田馬場鬼子母神に住む先輩の詩人秋田徳三(1882~1962)の知遇を得ている。徳三は青森の出身でのち雨雀と号し、演劇家となって大成したが、予科上級で米沢の出の宮崎省吾とも知り合い、省吾からは描画の手ほどきを受けている。1912年(大正元)頃民次が絵を描き始めたのはそもそもこの省吾の導きによるものである。省吾の同郷の早稲田英文学担当教師本間久雄(1886~1981)とも知り合い、その周辺の芸術家との交誼も始まった。1914年(大正3)9月省吾は同郷の椿貞雄を民次に引き合わせ、のちに、貞雄と民次は共に美術の世界に進むこととなる。省吾、貞雄、民次はほぼ同齢の青年たちであった。

宮崎省吾は、岸田劉生、万鉄五郎、木村莊八、斎藤与里らが中心になって起こしたフェウザン会(1912~13)への出品画家としても名を残した。民次の心を美術に向かわしめ、方向づけた貴重な友人である。

## 3

1914年(大正3)民次は早稲田大学予科を中退、アメリカに渡った。オレゴン州ポートランドには実兄津久井育平がいた。横浜港には長兄北川米太郎と早稲田の同僚で文化活動のリーダー西谷正治が見送りに来た。

アメリカでは、まずポートランド市の兄の家に身を寄せ、レストランで働きながら語学校に学んだ。1年の後、シカゴに移動、滞在ののち、1916年（大正5）初め、ニューヨークに赴いた。

当初、芝居の「書き割り」（舞台背景）を描く仕事を見つけ、のち、シューバート、ベラス、モロスコ等の劇場の舞台を担当し、その技術は高く評価された。各劇場は地方公演も企画し、「書き割り」の仕事は無数にあったといわれる。その後長く、この一連の仕事に従事し、1919年（大正8）頃、アート・スチューデントズ・リーグ（美術学校）に入り、スローンの画室の夜間部に在籍した。

ジョーン・スローン（1871～1951）はソシアリズムを信奉、雑誌『マツシズ (Masses)』（民衆・下層民）を編集、同誌に諷刺漫画等を寄せた。自らの所信をテーマに油彩画を製作してアピールするなど活動を続けたが、1916年（大正5）頃、社会党（アメリカ）を離脱、その秋9月アート・スチューデントズ・リーグの教師となった。

スローンは、学生たちに対象を克明にありのままに描く思想と技法を伝え、特に民衆を描くことを勧めた。民次は、スローンの思想的確かな構図指導に魅力を感じ、この師のもとで学んだ。スローンの指導を受けた日本人画家、石垣栄太郎、ヘンリー杉本らは、スローンの教えをよく守り、生涯下層民の生活と苦悩を画面に表現するモチーフを貫いているが、民次も庶民の生活を一生のテーマとしている。

同じ時期にアート・スチューデントズ・リーグに学んだ国吉康雄は、スローンの画室に属する学生ではなかったが、民次と相知り、他の学生をもまじえ、芸術や社会を論じている。その頃康雄はルノアールにあこがれ、民次はセザンヌを支持した。民次はニーチェやフロイトの思想や著作にも触れ、哲学や精神分析学の知識をも深めつつあった。民次は絵画だけでなく、その関心は美術・芸術・社会一般へと多方面に向けられた。

同じ頃、民次はデンマーク青年トスタイン・ミュラーと知り合い、2人で写真の研究を始めた。ニューヨーク市内を撮影して廻り、2人でアルフレッド・スティーグリッツ（1864～1946）を訪ね、その批評を乞うたこともあった。

1922年（大正11）10月、民次はミュラーとともに、6年滞在したニューヨークをあとに、フロリダ州に移り、数か月ののち、（民次は）1人でマイアミに移動、日本人経営の農園の労働監督者となった。さらに、キューバに移り、ハバナのホテルで働いていたが、盗難に会い、アメリカで働いてためた現金3000ドルとデッサン等をすべて失った。

この盗難事件のために、身近に金品が乏しくなった民次は、以後10年余りをメキシコで過ごすことを余儀なくされた。

#### 4

1923年（大正12）民次は、アメリカ南部やキューバを放浪し、9月にメキシコのオリサバに着いた。しばらくイコーンの行商にたずさわったのち、メキシコ国立美術学校に入学、3か月で同校の課程を終えた。

芸術家としての本格的な素養を深めたこのメキシコ時代は、民次にとって、美術教育に携わる最初の契機が得られたことでも特筆すべきである。

1924年（大正13）チュルプスコ僧院付設の野外美術学校のスタッフとなり、校長アルフレッ

ド・ラモス・マルチネスの知遇を得た。

1925年（大正14）トラムパム野外美術学校が開設され、開設1月後に校長ディアス・デ・レオンの依頼により、同校での授業を開始した。間もなく生徒の作品展を鉱業会堂で開催、メキシコ大統領、文部大臣、画家オロスコ、リベラらの賞讃を得、のち同展覧会の一部をヨーロッパ各地で巡回した。フランスでは、ピカソ、マティス、藤田嗣治らが賞讃した。

1926年（大正15）4月、トラムパム野外美術学校の正規の教職員になった。「日給3ペソの小使い」の待遇であったが、校長はほとんど出勤せず、民次は教師として、自分の考えどおりの美術教育を行うことができた。

こうしたメキシコ在任期間中、民次が得たものの一つに多様な版画の技法が挙げられる。

石版の技術は、アメリカ帰りの画家エミリオ・アメーロから伝授された。木版は、木口木版の専門作家ディアス・デ・レオンに個人的に教授されたものであった。銅版は、ディアスがフランス語の技法書をひもとき、素材と格闘しながら、同書の内容を検証するのに立合いつつ、実地に修得したものである。

この他、メキシコ在任時代に民次が刺激を受けた芸術家としては、ポサダがいる。ただし、民次は生前のポサダに会ってはいない。死後にその作品に触れたのである。ポサダは60年の生涯を版画に捧げた大家であったが、主として木口木版、凸版等を応用、10000点にも及ぶ作品を遺している。ポサダ没後、リベラらがポサダ画集を編もうと、ポサダの旧工房を訪れたが、この時民次も同行している。

1929年（昭和4）11月17日、民次は二宮てつ乃と結婚した。民次35歳、てつ乃26歳であった。てつ乃は日本で女学校を終えてのち、東京築地の聖露迦病院看護婦をしていたが、同病院に入院中の駐日スペイン大使令嬢の介護を担当した縁で、スペインまで付添って渡航。のち同大使がメキシコ転任の際、大使一家に伴ってメキシコまで移動し、メキシコに滞在していたという。翌年、長女が生まれた。

1931年（昭和6）秋、野外美術学校をタスコに移し、民次はその校長となった。この地で、後年活躍する多くの人材が育成された。

1933年（昭和8）には、多くの人の訪問を受けた。藤田嗣治、国吉康雄、イサム・ノグチ、リベラ、シケイロスらである。

## 5

1936年（昭和11）夏、民次はタスコの野外美術学校を閉じ、その秋、日本に帰国した。日米の児童画比較をテーマとするグッゲンハイム奨学金の取得と就学期を迎えた長女を日本で入学させることが目的であった。

帰国後静岡県、のち愛知県瀬戸市の妻の実家で過したが、先年藤田嗣治が日本に持ち帰った民次指導のメキシコ児童画の展覧会が、この年東京日本橋白木屋で開催されることとなった。

1937年（昭和12）の二科会に「タスコの祭日」、「銀鉱の内部」を出品、嗣治の推薦により、同年二科会の会員となった。この年東京に移転、以後しばらく東京を活動の拠点とした。

1938年（昭和13）2月、横浜市教育会館において、「私の美術教育」を演題に講演した。この時藤田嗣治は「メキシコと北川君」なるテーマで話している。

1939年（昭和14）から、貞次郎との交流が始まったが、貞次郎は当初民次の作品を理解でき

ず、殆ど評価してもいなかった。ある時、羽仁五郎が「岩山に茂る」(1940)を見て「(作者は)時代の反対に立っている」と評するのを聞き、軍国主義に対峙する民次の姿勢にやっと気づき、貞次郎は、民次の作品のよさと意味とを理解し始めた。

第2次世界大戦勃発直前の1941年(昭和16)夏、民次は貞次郎の軽井沢の別荘を訪ね、絵本製作の相談をもちかけた。それは亜鉛板を用い、直接画家が描いて色ごとに製版し、オフセットの手刷りで刷り上げるというものである。そうすれば、従来見たこともない鮮やかなセンスある版画が実現できるというものであった。版画によって構成した新しい絵画の企画である。

民次が推薦した画家は、丸木俊、木下繁らで、翌1942年(昭和17)版画による絵本『マハフノツボ』がシリーズ第1集として完成した。

貞次郎の述懐によると「すぐれた印刷効果をあげていて、わが国の子どもの絵本で、これだけ神経のゆきとどいた印刷はその後もう出会ったことがない」とある。よい出来ばえであったが、一般には同書の「子どもや登場人物の表情がグロテスク」と見られ、さしたる成果には至らなかったようである。

1943年(昭和18)秋、民次一家は愛知県瀬戸市安土町に疎開し、その地で終戦を迎えた。1944年(昭和19)から民次は瀬戸高等女学校の図画教師となり、敗戦まで同職を続けた。

## 6

戦後の民次の活動は多岐にわたっている。まず、その製作においては、40年の間に20回近い個展を行い、美術館での回顧展は4回にも及んだ。美術教育に関する事項では、1949年(昭和24)8月から毎夏2年間、名古屋市東山動物園内に名古屋動物園美術学校を開設。小学生の絵画を指導し、1951年(昭和26)には名古屋市東山に北川児童美術研究所を設立した。この前後、高知、福井、新潟、長野等で美術教育に関する講演を行い、1952年(昭和27)5月、創造美育協会設立時にはその発起人として参画している。以後創美(創造美育協会または創造美育運動)の関係のいわゆる全国セミナーにおいて、講演を続けた。さらにこれらの活動を集約しているのは、この時期に著された書物や画集である。

こうした文化・美術上の所産を通して、民次はいかなる思想を展開してきたか。また民次の芸術の本質とはなにか。民次の作品の造形上の特徴とは何か。さらに貞次郎は民次の思想のいかなる部分に感銘し影響を受けたか。これらについて、以下に順次述べさせていきたい。ただし、ここでは図版を用いての論証を省略し、言語のみによる叙述や資料の紹介に終始する。

(1) 民次は人間を描く。民衆を描く。民次は民衆の心情を描こうとする。この場合の民衆とは貞次郎によれば「特権階級に属さない、おおぜいのひとびと」であり、「愚かで、通俗を愛し、洗練されていず、美術的なセンスも高くはないが、支配する階級に対して、やゆと反抗の精神を無意識にいだく」(「北川民次の歩んだ道」)人々であるとする。さらに民衆について貞次郎は「心の底には、自分たちを抑圧している階級があることを感じ、それに反感をいだいていて、何かのきっかけに、それは大きなエネルギーに変化するかもしれない。この素朴な感情、自己を飾り、外観をよそおうことを、本質的には嫌う感情をもち、社会やものごとを貫く実態を本能的に的確につかむのが民衆の資性」という。

民次は、民衆をいかに描いたか。「抵抗と連帯の精神、強靱なエネルギーにみちた生活力、エロティシズム、現実を直観するすなおさ」について描いた。モチーフとしては、「風景、

花、母子像」のほかに「政治や社会問題を取材」して描いている。

勿論戦時中にも、彼の一貫した思想は制作の上に出表されていた。「銃後の少女」(1939)、「岩山に茂る」(1940)には、軍国主義に反発する思いを表現した。戦後、いち早く発表した「重荷」(1946)、「地にうごめく」(1947)、「雑草の如く I, II, III」(1947~49)は、敗戦時の民衆の苦悩を描いたものである。「降霊術」(1953)、「蝗の群れ」(1959)、「白と黒」(1960)、「セブンティーン」(1961)、「二十年目の悲しみの夜」(1965)は、時事・政治・世相に関する課題に取材したものであった。

- (2) 民次は、民衆を描いたが、その民衆の生きる現実の場に関する政治の問題を積極的にとり上げるべきであると考えた。「夏の宿題」(1970)、「女医」(1970)、「百鬼夜行」(1973)等がそれである。政治や思想を抜きにしては作品の制作は成立しえないという考えに貞次郎は大いに感化を受けた。貞次郎はいう「日本の画家で政治をテーマにするひとが暁の空の星のように少ないのは、いったいどうしたことだろう。」<sup>(3)</sup>
- (3) 民次の作品の造形上の特徴を挙げるなら、貞次郎の言葉を借りればその「構成の堅固さ」にあらう。民次自らの言葉を引こう。「美というものには実態がない。われわれ人間が、その考えを力強く外部に出そうと努力するところに、美が生まれてくるのだ。だから人間は闘争の目標をさだめ、弱いものが強い者に対して闘うところに、何かがでてくる。それが美となるのである。美を美として追っても、たいしたもののは生まれゃあしない。」

(本章終わり)

## 注

- (1) 久保貞次郎「世界史における日本の文化」(『三枝博音記念論集』1964)
- (2) 久保貞次郎「北川民次の歩んだ道」(『北川民次画集』日動画廊, 1974)  
久保貞次郎「北川民次略歴」(『久保貞次郎・美術の世界1』叢文社, 1984)  
「北川民次美術教育年譜」(『現代美術教育叢書1』現代美術社, 1978)  
この他、関係者からの聞き取り調査による。
- (3) 美術と政治とのかかわりについて、貞次郎も民次も、そう単純な割り切り方をしていなかったことは事実である。字づらで読めば、「社会主義リアリズム」を全的に肯定することとなる。私たち多くの美術史、美術教育の関係者は、かかる考えは美術の本質をそこなうものであると考えており、早くから危険視している。これについては、改めて論議する余地があり、それはそれで意味あることと考える。

## 参考文献

- 久保貞次郎『児童美術』美術出版社 1951  
久保貞次郎『児童画の見方』新教育協会 1954  
久保貞次郎「幼児の絵の見方と指導」(『幼児保育講座2巻』)国民図書 1950  
久保貞次郎「創作」(『新しい育児百科』)日本評論社 1950  
久保貞次郎「子供のさし絵」(『アンデルセン児童画集』)新潮社 1953  
久保貞次郎「児童美術教育とクロードの絵」(『クロード・岡本少年の絵』)王様商会 1954

久保貞次郎「アメリカの美術教育」(『現代世界学童美術全集Ⅰ』) 河出書房 1955

久保貞次郎「教師とは何か」(『日本の教師に訴える』) 新評論社 1955

久保貞次郎「造形芸術と教育」(『現代芸術講座Ⅱ』) 河出書房 1955

久保貞次郎「児童画」(『教育学辞典Ⅲ』) 平凡社 1955

## A Study on Kubo Sadajiro

Masakatsu OTA\*

### Abstract

Kubo, sadajiro (1909~1997) was one of the famous art educators during World War II in Japan.

He believed that the most important thing is liberation from oppression. He thought he could see the freedom of children's feelings and thinking through their art works. He promoted the expressional power centered art education and denied the teaching policy of copying models of exemplary works.

He lead the great number of art educators and art teachers in the 1950s and 1980s in Japan. In this thesis the author would like to verify the meanings of Kubo's concepts and thoughts of art education.

---

\* Division of Music and Arts: Department of Art and Design